

ずっと恋焦がれていた人と両思いになれて喜んだ束の間、衝撃的な事実が伝えられて、悩んだりもしたが、どうにかこうにかやってこれた。

クリトリスの調教も頑張って、順調に大きくすることができているので、ご褒美にお城の外に連れて行ってもらえるということになったのだが……………。

5 大好きな人と久々の再開

「うーん……………」

「こっちはどうですか？」

クレアが、ルシアンに仕立て屋さんを呼ぶよう頼んでくれて、朝から洋服選びで大忙しである。

「動きやすい服装がいいよねっ……………！」

「リディア様ー！さつきも言いましたけど、週末のデートの服だけを選んでるんじゃないですよー！普段着る服と、お呼ばれた時の服、何着も選ばないといけないんですから！」

頬をプクッと膨らませてぶんぶん怒っているクレア。

「クレア、ごめんね？ルシアンと外へデートに行けるの楽しみすぎて……！今から、他の服もちゃんと選ぶからそんなに怒らないでー！」

「まだ、2着しか選んでないんですよー！このままだと、日が暮れてしまいます！」

クレアにアクセサリーや靴も合うようにコーデしてもらって、その中から気になるものを選んでいく。

「あ、例のものも持ってきてくださいましたか？」

クレアが、仕立て屋さんに耳打ちすると、仕立て屋さんは手をパンッと叩いて、ラグジュアリーな箱の中から下着を並べ始めた。

全てレースの生地でスケスケの下着ばかりである。

「素晴らしいです！」

「クレアさんに頼まれたお店から取り寄せました」

「サイズも言ったものを用意してくださいましたか？」

「もちろんです！あ、こちらはルシアン様に直接お渡しいただけますか？例の頼まれていたものです」

「ああー！私がお渡ししておきます」

「こちらは全部購入でよろしかったですか？」

「ええ！デザインもバッチリです！いつも素晴らしい服をありがとうございます」

何やら盛り上がっているが、他所行きのドレスを選ぶので大変で、クレアと仕立て屋さんの会話に入っていない。

なんとか日が落ちる前に、服選びを終えることができた。

「ふう……………流石に疲れた……………」

「リディア様っ！お疲れ様でした！洋服選び頑張ったご褒美に、私からエステをプレゼントします！」

「本当！クレアのエステ気持ちよくて大好きっ！」

「今日は、早く休んで、明日は、週末のデートのお洋服を選びましょう！」

実は、ルシアンの仕事がかなり忙しいらしく、ここ数日、王城に泊まり込みで帰ってきていない。

寂しいけれど、クレアと一緒にお茶の相手をしてくれたりするので、まだ、大丈夫だ……。街に出かける約束をしてるのは2日後だけど、ルシアン帰ってくれるのかな……。クレアのエステを受けながら、ルシアンのことばかり考えてしまった。

「リディア様！ルシアン様、夕方にこっちへ着くみたいです！」

「……………！！！！本当っ……………！！！」

明日のデート服を選んでいて、少し休憩しようとお菓子とお茶を用意しに部屋を出て行ったクレアが、息を切らしながら戻ってきた。

ルシアンに会えるとわかって、嬉しくて、部屋の中をうろうろしてしまった。

「じゃあ、明日のデートは予定通り行けるかな……!?」

「行けると思いますよー!少し休憩して、アクセサリーと靴を選んで、ルシアン様を出迎える準備をしましょう!」

1週間ぶりに会うので、少し緊張する。

ルシアン、きつと疲れてるよね……!帰ってきたらいっぱい癒してあげないと……!!

「ね、ねえ、クレア………」

「なんでしょうか?」

デート着ていく服に合わせた靴とアクセサリーを選ぶのに集中しているクレア。

「あのさっ………ちょっと聞きたいんだけど………」

「なんですか?」

「ルシアンのこと癒してあげたいんだけど、ルシアンは何されたら嬉しいかな………?」  
「……………!!!!!!可愛いつ……!可愛いですつ、リディア様………!!ルシアン様が、リ

ディア様のこの献身的な姿を見たら、きつと嬉しくて倒れてしまうかもしれませんね……………で、ルシアン様を癒してあげたいと……………」

「う……………うん。私でもできることってないかな……………？手作りのお菓子とか……………？どうか……………？」

「……………それは絶対に喜ぶと思いますけど、もっとルシアン様の体を癒せること、ありますよ……………♡」

「私でもできること……………？教えてっ！クレア……………」

「いいですよ」

ソファに座って、クレアの入れてくれた紅茶を飲みながら教えてもらうことになった。

「ルシアン様の、肉棒をリディア様が舐めるんですっ！リディア様がルシアン様にされて嬉しいことをすれば、ルシアン様も癒やされると思いますか？」

それは、考えたことがなかった……………。思えば、いつもしてもらってばかりで、ルシアンに何かしてあげたことがない……………。

最近クレアに勧められて読んだ恋愛小説に、そんなシーンがあったような気がする。

女の子が彼氏を喜ばせたくて、一生懸命肉棒を舐めるシーンを……………。

でも、ルシアンのごく大きいのに、口に入るかな……………。

いやっ……………いつもしてもらってるんだ……………そんなこと考えてないで、実行してみないと……………！！

「リディア様？」

「そう……………だよね……………。いつもルシアンに気持ちよくしてもらってばかりだし……………私もルシアンに気持ちよくなってもらいたい……………！」

「素晴らしいですー！ルシアン様、とっても喜ぶと思いますよー！」

「でも、やり方……………わからない……………」

「んー、やり方を詳しく教えるとルシアン様に怒られてしまいそうなので、簡単にしか教えられないかもしれませんが……………」

軽くやり方を教えてもらって、あとはルシアンに聞いてくださいと言われ、講座は終了してしまった。

「リディア！」

「ルシアンっ……！お帰りなさいっ！」

移動魔法で帰ってきたルシアンが、寝室のドアを勢いよく開けて、満面の笑みで抱きついてくる。

久しぶりにルシアンの匂いに包まれて、無事帰ってきてくれたことを実感して、ほっと安心する。

「長い間、城へ1人にさせてしまつてすまなかつたな。いい子にしていたか？」

ちゅっとおでこにキスされる。

「んっ………クレアが、たくさん話ししてくれたから、寂しいのも少しかったよ……いい子にもしてた………。ルシアン、お仕事お疲れ様っ！」



ルシアンの胸に顔をすりすりと呼しつけると、頭を優しく撫でてくれる。

「ありがとう。明日のデートは予定通り行けそうだよ、楽しみだね」

「ほんとっ……！よかった、すごく楽しみにしてたから……」

久しぶりに会えたのが嬉しくて、顔が綻んで戻らない。

「さっきクレアにもうすぐ夕飯の用意ができると言われたから、食べに行こうか」

「……うんっ……！」

ここ数日の出来事を話しながら食堂に向かう。

夕飯を食べながら、明日の予定を聞く。

「明日は、昼前に出て、街から離れたところで昼食を取ろうと思うんだ。お弁当を頼んだからそれを一緒に食べよう」

「お弁当……！」

「その後、街中を少し歩いて、教会に行ってみようかと思うんだがどうだろうか？」

「教会……？」

「ああ。結婚式を挙げる場所を少し見せておこうかと思つてね」

「行きたいっ！どんな場所か気になる……！」

「よかった。お昼を食べた後、牧師に教会を案内してもらうまで少し時間があるから、リディアが行きたいと言っていた、本屋に行こう」

「本当……！！クレアに本屋さんのことを聞いた時から行つて見たいと思つてたの……！このお城の本もその本屋さんに頼んでるんだよね？」

「よく知ってるね。そうだよ、その本屋の店主が私の父と仲が良くてね」

「ルシアンのお親って王都の向こう側の領地にいるんだよね？」

「そうだよ。向こうの領地も今色々あつて忙しくてすぐこっちに來られないんだ。リディアには結婚式の前日に紹介するからね」

夕飯を食べ終えてから、頭の中は、ルシアンを気持ちよくすることはいっぱいだった。ルシアン疲れてるのに、そんなこととして大丈夫かな……。すぐ寝たいって言われなかな……。

色々なことを考えているうちに、お互いに湯浴みを終えて、寝室に集合していた。

久々にみる、湯浴み上がりのルシアンは、色気ダダ漏れで、たまらない。

ルシアンを気持ちよくすると決めたのに、おまんこを舐めてもらいたくて仕方なくなってきたしまった。

だめだめ！今はルシアンに気持ちよくなってもらうことだけ考えるの……！

「おいで、リディア」

ベッドに腰掛けて、手を広げて艶めかしい表情で見つめてくるルシアン。

その表情にセックスの時のルシアンを思い出し、思わず目がとろけてしまう。広げられた腕の中に吸い込まれていく。

「はぁ……久しぶりのリディア、たまらないな……こっち向いて？」

顔をルシアンの方にと上げると、ちゅつと軽く唇が触れ合うキスをされる。

……ちゅっ……ちゅ、クチュっ……ちゅっ……

ハムハムと唇を何度も重ねては、どんどん深くなっていく。

「んっ……ふぁっ……んぁぁっ……♡」

久しぶりのキスで、脳がとろけていく。

気持ちいい……ルシアンルシアンの舌、あったかくて気持ちいい……。」

ヌツと隙間から舌を入れられては、クチュクチュと絡められる。

「あうっ……んっふっ……♡」

「舌絡ませるの上手になったね、リディア」

クチュクチュと舌を絡ませられながら、ガウンを脱がされる。

「ん、これは、クレアが頼んだと言っていた新しい下着かな？」

「んはっ……うんっ……新しいやつ………」

スケスケで、乳首が微妙に見えてしまう。

パンツも真ん中に布がなくて、足を開いたらおまんこが丸見えになる……。

こんなエッチな下着、王都では絶対、手に入らない……。

「可愛いよ。リディアはどんな下着を着ても似合うな。ここに布がないのもえっちでいいね」

ルシアンのおまんこに移動して、キスで濡れ濡れになった密穴の表面をクチュリと擦る。

「んっ……ふあああっ……♡♡♡♡」

ルシアンにおまんこをいじられた瞬間、頭の中がおまんこで気持ちよくなることはいっぱいになりかけたが、気を取り直す。

「ルシっ……あんづ………♡♡♡」

「どうしたんだ？リディア」

「おまんこっだめづ………！！」

「だめ？どうして？久しぶりにおまんこ舐められたくないのか？」

ルシアンの言葉に一瞬、意志が揺らぎそうになるが、グッと堪える。

「きよっ、今日は、私がルシアンを気持ちよくするのっ………」

「………リディアが………？」

「うんっ………ルシアンお仕事頑張ったから、私が癒してあげるっ………。いつもルシアンに気持ちよくしてもらってばかりだから、今日は、私がルシアンのこと気持ちよくするっ………」

「そうか、リディアが、私のことを気持ちよくしてくれるのか………嬉しいよ」

ルシアンの表情がトロンと柔らかくなる。

クレアに押しもらったように、まずは、ルシアンのシャツを脱がせて、上半身裸にする。

鍛え上げられた筋肉が月明かりに照らされて、美しく思わず見惚れてしまう。

「んっ……………ふっ……………♡♡♡」

まずは、ルシアンの首元にちゅっ、ちゅ、とキスを落としていく。

ルシアンがいつもつけてる爽やかな香水の香りがほんのり鼻を掠めて興奮してしまう。

「私の真似をしてるのか。同じ舐め方をしている」

頭をふわりと大きな手で撫でられる。

ルシアンがいつもやってくれるみたいに、鎖骨を舌でレロっとなめて舐める。

ここを舐められると、背筋がぞくぞくして気持ちいいのだ。

「ふふっ……………気持ちいいが、少しくすぐったいな」

無邪気に笑うルシアンも可愛い……。

ダメダメっ！気持ちよくなってもらうんだから、笑わせちゃだめっ……………！

ここは絶対に気持ちいいはずっ！と、ルシアンのピンク色の乳首をレロっとなめる。

「んっ……………」

やった！ルシアンの喘ぎ声聞いた……。

そう思って、自分がやられて気持ちいい舐め方をしたが、またふつと笑われてしまった。

「ルシアン……………気持ちよくない……………？」

「ああ、笑ったりしてごめんね、リディア。リディアは、自分が気持ちいいこと私にしてくれてるんだよね？嬉しいけど、乳首は性感帯じゃないかな。どちらかというと、こつちを気持ちよくしてくれると嬉しい」



ルシアンが、私を腰に手を回してグッと下に落とすと、ゴリッと何か硬いものがおまんこに当たる。

「んっ……………♡」

ルシアンの勃起した肉棒が、おまんこにフィットしてクリトリスに当たる。

「わかつ……………たっ……………」

ルシアンの膝の上から降りて、肉棒が顔の目の前にくるように柔らかい正座状態になる。

「あつ。リディア」

「ん……………なに……………？ルシアン」

ルシアンがなにか思いついたかのように口を開けて、手をポンと叩く。

「せっかく久しぶり触れ合えるんだ。リディアも一緒に気持ちよくなろう」

ベッドの上に乗るように言われ、床から移動する。

「足をこっちにして、私の顔に跨ってくれ」

「ん……?」

言葉で説明されても、よくわからなくて、狼狽していると、ルシアンに手や足を掴まれて、誘導される。

「何っ……この体勢っ！やだっ………!!」

ルシアンの目の前におまんこがきて、私の目の前には、ルシアンの肉棒がくる体勢になっていた。

少し腰を下げれば、おまんこでルシアンの顔を潰してしまう。

恥ずかしくて、体を前に動かして逃げようとしたが、腰を掴まれてしまう。

「やだ？リディアのおまんこは早く舐めて欲しそうだぞ？愛液が私の顔に垂れてきそうだ」  
ルシ안의指で大陰唇をクパアと開かれて、じっくり見られる。  
そのまま、密穴の表面をクチュクチュと軽く撫でられる。

「んっ……………♡♡♡」

久しぶりに大好きなルシアンにおまんこを触られて、絶頂したい気持ちでいっぱいになってしまう。

ジェフリーもルシアン of 側近として王城に滞在していたので、その期間は、クリトリスを大きくする授業もお休みだった。

1人でクリトリスを弄ってしまい、怒られてしまったので、ずっと触るのを我慢していたせいで、数日間の疼きが溜まっている。

クリトリスの気持ちよさを知らなかった以前は、こんなことで悩んでことなかったのに……………！

「リディア、おまんこでイけなくていいのか？」

愛液でたっぷり濡れた指でクリトリスの先端をすりすりすると2回撫でられた後、パツと離されてしまった。

たった、2擦りなのに、疼きは増して、もう、クリトリスのことしか考えられなくなっ  
てしまった。

「イ、イきたいっ……………♡♡♡」

「素直になれていい子だね。いっぱい舐めてあげるから、リディアも私の肉棒、頑張つて気  
持ちよくしてね」

「……………う、うん……………♡♡♡♡♡」

「もう少し腰下ろして」

ルシアンに腰を掴まれ、グッと下に下ろされる。

「きゃうっ……………♡」

舌で、ツンっ、とクリトリスを刺激され、びっくりして声が出ってしまった。

ルシアンが舌が、クリトリスを包み込んで、レロレロと舐め回すと、気持ちよくて、本来の目的を忘れて、甘い声が出てしまう。

「リディア？お口、どうするんだっけ？」

「あうっ……………！ごめんなさい……………♡♡♡」

ルシアンに指摘されて、急いで、口をルシアンの肉棒へ移動させる。

また、口に唾液をいっぱい含ませて、先端をチロチロ舐めたり、亀頭部分を口の中に入れてジュッと吸ったりする。

……………ちゅっ……………ちゅぐっ……………ちゅばっ……………レロっレロっ……………

ルシアンが舌でクリトリスを左右にピンピン弾くたび、気持ちよくて、肉棒から口を離

してしまふ。

その度に、クリトリスをジュッと吸われて、叱られる。

「お口離しちやだめだろう？私のこと、癒してくれるんじゃないかなかったか？」

「んぶっ……ごめつ、なさいい……♡」

……じゅっ……じゅぼっじゅぼっ……レロっ……

ルシアンにクリトリスを弄られながらも、なんとか、ルシアンを気持ちよくさせることに集中する。

咥えて、出来るだけ奥まで入れて、抜いてを繰り返す。

ルシアンの息遣いが少し荒くなつて、おまんこに吐息が当たる。

「んっ……んぶっ……おっ……んあぁっ……ふっうう……気持ちいい……  
クリっ気持ちいい……」

ルシアンが舌が気持ちよくて、無意識に腰を揺らしてしまう。

クリトリスをじゅつと強く吸われ、垂れそうな愛液を戻すように、密穴にクチュクチュと指を出し入れされる。

ぬぼっ、ぬぼっ指を出し入れされるたびに、気持ちよくてアナルに力を入れてしまう。

「リディアも、舐めるの上手だよ。」

ルシアンが、気持ちよくなってくれてる……………!?

嬉しい……………もっと、ルシアンに気持ち良くなって欲しい……………。

おまんこで思い切り気持ち良くなりたい気持ちを我慢しながら、ルシアンの肉棒をひたすら咥え続ける。

「リディアはお口でも気持ち良くなれるエッチな女の子なのかな？喉奥まで入れた瞬間、ここがキュッと締まるね」

指で密穴を激しく掻き乱される。

「んあああづ………!!!だめええ………気持ちいい………きちゃうづ  
………イくづ………♡♡♡」

絶頂の波がきて、思わず体に入力、受け入れおうとするも、大きな快楽は訪れない。  
「リディア、今日は私を癒してくれるんじゃないか？先にイってしまうなんてずるい  
じゃないか」

ずるい………確かにそうだ………。

「うう………ごめ、なさいっ………でもっ、おまんこ気持ち良くて………すぐ、気持  
ちいいのきちゃうづ………ルシアンのことっ………気持ちよくしたいのに………」  
「リディアはおまんこ舐められるの弱いからな。じゃあ、リディアがコントロールできる体  
勢にしようか」



そういうと、ルシアンは、私を膝の上に移動させた。

「これ……………」

「これならリディアが自由に動けるだろう？」

ルシアンは、体を後ろに倒して、ベッドに肘をつく。

おまんこの目の前には、勃起した肉棒がいて、自分で挿れて腰を動かせと言われていたことに気がつく。

以前、ルシアンの上でぬぽぬぽと腰を上下させたことがあるが、2回目でも恥ずかしさは変わらない。

自分が、ルシアンの上で、激しく動いてる姿を想像して、顔を赤くしてしまう。

「ちょっとお手伝いしてあげるね」

腰あげて、と言われて、ベッドに膝立ちになると、肉棒を蜜穴にくちゆりと擦り付けられる。

「リディアのタイミングでゆっくり腰下ろして、奥まで挿れて、いっぱい腰動かしてくれたら、私も気持ちよくてなれるんだけどな」

月明かりに照らされたルシ안의瞳は、キラキラ輝いて、頬は少しピンク色に染まっている。

騎士団長として仕事してる時からには到底想像できないくらい、艶めかしい顔で、このルシアンを見ることがするのは私だけなんだと思うと、嬉しくて、欲情してしまう。もっと、ルシアンのお私しか見られないような顔が見たい……………。

「わかつ……………たっ……………がんばるっ……………♡♡♡♡」

蜜穴に肉棒が当たっているのを再確認して、腰を少しずつ落としていく。

「んっ……………♡♡♡きつっ……………」

亀頭部分が大きくて、痛くはないけど、キツくて苦しい……。

「少しきついね」

そういうと、おまんこについた愛液を指につけて、クリトリスをコリコリと左右に揺り始めるルシアン。

クリトリスを弄られるのが気持ちよくて、無意識に腰がカクカク動いて、肉棒をどんどん飲み込んでいってしまう。

「んあっ……………♡らめっ……………♡」

「奥まで挿れるの、少し楽になるだろう？」

「んっ……………♡あうっ……………♡ふっ……………うう……………♡」

蜜穴をクパクパさせながら、ルシアンの肉棒をどんどん奥へ受け入れていく。

1番太い亀頭部分を抜ければ、奥まで受け入れるのにそう時間はかからなかった。

「奥♡はいったあ……………♡♡♡♡」

「奥まで挿れるの、上手に出来たね」

褒めるように、クリトリスを親指で優しく撫でてくれるルシアン。

「ふああああ……………♡♡♡♡」

奥まで挿れたのはいいものの動くのが恥ずかしくて、躊躇してしまう。

「リディアの好きなように動けばいいよ。この前の動き、忘れてしまったのか？ こうだろう？」

ルシアンのかなで、腰を掴まれる。

そのまま上に上げられ、急に手を離される。

「……………んあああ…！！！！おぐ……………！！」

まさか、ルシアンが手を離すと思わなくて、急に奥をバチュッと突かれて、びっくりしたのと、気持ちいいのとで大きな声が出てしまう。

また、ルシアンの手で腰を上へ上げられ、落とされるのを繰り返される。

「んっ……………あんっ……………ふっ……………うんっ……………」

「こんな感じで、リディアの好きに動いてみて」

ルシアンの手が離れていく。

ほんの少し腰をあげて、下ろしてを繰り返す。

奥に当たるのが気持ち良くて、腰を下ろすたびに甘い声が出てしまう。

「んあっ……………奥……………気持ちいい……………♡」

「奥、気持ちいいね。私も気持ちいいよ」

ルシアンの表情は余裕に満ちている。

「ルシアンつもづ……気持ちいいづ……?」

「気持ちいいよ。でも、少し物足りないかな」

「えう……………」

こんな優しい腰振りじゃ満足できないのも当たり前だ。

もっと、頑張らないとっ……………!!

気合を入れて、腰の動きを激しくする。

もっと、ルシアンに気持ち良くなつてほしい……………!!

「んあっ……………うう……………これっだめえ……………!!奥、いっぱい突かれて、しゅぐづ

……………イっちゃううう……………♡」

肉棒を奥まで挿れて、体をビクッと震わせて絶頂してしまう。

「あう……………ごめんう……………ルシアンのことづ気持ち良くしたいのにいい……………!!

ルシアンの余裕な表情を見て、全然癒やせてないと、涙が溢れてきてしまう。

「ああ、可愛すぎるな……………おいで、リディア」

腕をグッと引っ張られて、ルシアンの腕の中に包まれる。

「ふっ…………うう……………いつも、ルシアンが気持ち良くしてくれるからっ……………今日は、気持ち良くなって欲しかったのにな……………」

「リディア、私は、リディア楽しそうな顔を見たり、私で乱れてる姿を見るのが癒しなんだよ」

「……………ん……………?」

「リディアが一生懸命尽くしてくれる姿も好きだけど、私は、それ以上に尽くして、幸せそうな顔をしてくれる方が嬉しいんだよ。無理して、与えられた愛情を返そうとしないで、いっぱい尽くされてくれると嬉しいな」

顔にかかった髪を退けて、涙がこぼれ落ちそうな目尻にキスをしてくれるルシアン。

「ルシアン……。でもっでもっ、私もルシアンに尽くしたいよ……。大好きで大切な人だもん……。」

「じゃあ、たまにお願い、聞いてくれる？」

「も、もちろんだよ……。ルシアンのお願いなら、たまにじゃなくても聞くよ……。」

「可愛すぎるな……。じゃあ、さっそくお願いしてもいい？」

「うんっ……。なに……？」

ルシアンの顔が耳に近づいてきて、低い声が耳奥まで響いてくる。

「リディアの奥、いっぱい突かせて」